

マレルブ小論

高橋安光

- 一 結婚、家庭
- 二 古錢學者ベレスク
- 三 アントワーンの死
- 四 パリのマレルブ
- 五 デポルト註釋
- 六 聖詩翻譯

—

「フランスワ・マレルブ氏は一五五五年頃ノルマンディのカーンに生れた。彼はノルマンディのロベール公に従つてイギリスへ銚をすゝめたマレルブ・サンテニャンの流れをくむ由緒ある家柄の出であつた、云々。」これはラカンによるマレルブ傳覺書の冒頭である。後年マレルブは自ら劍帶貴族の出身を誇つて成り上り貴族を輕蔑しているが、彼の父親はカーンの初審裁判所の評定官に留つていたことを考ふるならば、九人兄弟の頭に生れたマレルブの生い立ちが恵れたものであつたとは思われない。一五七二年頃、彼は父の許を去り、アンリ二世の庶子アンリ・ダングレーム公 Henri d'Anglême に仕え、一五七六年大修院長となつて赴任する公の祕書格でプロヴァンスに移つた。一五八一年、彼はプロヴァンスのエーリスに住むマドレーヌ・ド・カリオリス Madeleine de Cariolis [ou Cariolis] という婦人と結婚している。この女性はマレルブとの結婚が三度目であつた。二度も夫に先立たれた未亡人と言へば、

相當年輩に聞えようが、彼女の母親が一五四八年に結婚している事實から推測すれば、彼女が何時生れたにしても、一五八一年マレルブに嫁いだ當時のマドレーヌは卅三歳を超えていたはずはない。その間の詳細は分らないが、おそらく彼女は精々卅歳前後であつたらうと推定されるわけだ。當時廿六歳の青年マレルブが若干年上の婦人に思いを寄せ、一人旅の寂しい身を託そうとしたことは、大いに有り得ることではなからうか。

こゝで従来しばしば問題にされてきたことは、マレルブがマドレーヌとの結婚によつて多額の持參金を手に入れたこと、またその持參金が彼の目的であつたこと、この二つの傳説が果して眞實であつたかどうかということである。

レーモン・ルベグ Raymond Lebegue の所説 (cf. Revue des Cours et Conférences, N. 3—N. 4, 1933) に従えば、マレルブがマドレーヌとの結婚によつて得た金額は三千エキュであり、それらはマレルブの借金返済のためにほとんど充當されてしまい、夫婦の生計は決して樂ではなかつたようである。家を飛び出したマレルブは父親からの仕送りもなく、アンリ・ダングレイム公の祕書程度でどれほどの給與が得られるはずもなかつた。だがこゝから直ちに彼の結婚が政略的であり守錢奴的であつたと速断することはできない。なぜならば、ラカンの覺書にも見られるごとく、パリに上京してからのマレルブは極端な貧乏生活に甘んじ、また自らそれを誇つているからである。(後述) しかも金錢に決して無關心ではなかつたマレルブ。私は問題の解決を求める代りに更に彼の生活態度を追究し、少くも傳説的歪曲をそのまゝ受けつぐことだけは避けたい。

マレルブは一六二〇年従弟のフランソワ・ド・ブライヨン Francis de Bouillon に宛てた書簡の中でこんなことを述懐してゐる。

「私がつとも懼れる不幸は、前にも申したように、子供の多いことです。他の不便なら慰しようもありましたが、こればかりはどうにもなりません。」

九人兄弟の中で育つたマレルブにとつて子澤山がどんなに家庭を惨めにするかは身を以て痛感していた所であろう。したがつて時代錯誤的な言い方を以てすれば、産兒制限はマレルブの生活觀の一つの根柢を成していたようである。彼は妻マドレーヌとの間に四人の子供を持つたが、最初の男兒アンリは一五八五年七月二十一日に生れ二ヶ月後には死亡、次男フランソワは一五八九年に死亡、長女ジッルデーヌは一五九一年九月二十二日に生れ一五九九年六月二十三日に死亡、末子のマルク・アントワーヌが生れたのはジッルデーヌが死亡してから十八ヶ月後であり、實に結婚後二十年を経ており、その間に生れた四人の子供たちは生存中に互いに顔を合せたことがないばかりでなく、各々の誕生の間に相當な開きがあつたのである。結局、マレルブは一人の子供だけを幸福に育てあげようと意圖しつつも、子供たちの早死にあつて四人目まで産ませる結果になつた、と想像されないであらうか。これが決して彼自身の功利的な考え方から出たものでないことは、彼が末子（つまり一人子の）マルク・アントワーヌに寄せる狂おしきまでの愛情（後述）によつて十分證明される。また娘のジッルデーヌが當時流行していたベストで死んだ時も、エイクスの市民たちは肉身をも放置して郊外に難を避けた中であつてマレルブは娘の枕頭を離れず最後まで看病してやつた。これは親として當然とも言えようが、彼をより理解しうる根據ともなろう。こうした家庭の父としてのマレルブを見る時、われわれは理性と感情が強烈に併存する悲劇的な人間像を見出すのである。これは他面において文壇におけるマレルブの肖像を畫くためには忽がせにできない粗描ともなりえよう。

二

われわれがプロヴァンスの首都エイクスを十七世紀に立ち戻つて考える時、畫家ヴァン・ルッと共に忘れられないのは當代稀有の博學ベレスクの存在である。哲學者ガサンデイによつて書かれた傳記でフランス思想史上重要な位置を占めるベレスクは一五八〇年の生れであるから、マレルブより廿歳も若いわけだが、幼時より優れた資質を現し、叔父に見せて貰つたローマ時代の古錢が病みつきとなつて古錢學さらに考古學へと入つて行つた。彼はダンテ、ベトラルカ、タソー、マキャベリが學んだ北部イタリヤのパドヴァ大學に遊學し、ルネサンスの碩學ビネリ教授から一層考古學に對する興味を煽られて歸つた。歸國後の彼はイタリヤのみならずヨーロッパ各國の學者達と文通し、さらに天文、氣象、地質、物理、動植物學へと百科全書的情熱をかたまむけつづける。今日、學問的業績の上からのみベレスクを評價するならば、彼は一個のアマトゥールと見做されるかも知れないが、その超人的な多様性と合理的方法論とは高く評價されなければならない。時々パリに上京したベレスクは著名な學者サロンを開いていたデュ・ピュイ Du Puy 兄弟の許を訪れ、バルザック、シャブラン、メナージュ等の文學者や、ガサンデイ、メルセンヌ神父等の思想家をはじめ、ヘインシウスやグロチウス等外國の學者と交際していた。また彼はドゥ・トゥ、カゾオボン、デポルト等ともパリで知り合つている。また彼自身もエイクスに一大智的サロンを形成していた。そこに出入する一人にマレルブがいたのである。しかも二人は非常に親しい關係を結ぶに到る。古錢學者と詩人、この奇妙な組合せは如何にして可能であつたのであろうか。

それは、上述のごとくペレスクが文人と交際があつたとか、文學を好んだとか云うだけではなお根據十分と申せない。すなわちペレスクがマレルブの文學の良き理解者であつたであろうことを先ず明らかにする必要がある。

ペレスクは彼の弟子に當るドニ・ギユマン宛の書簡の中でこう述べている。

「私は君につきのことを理解していただきたい。自然な素直さは仰山な言葉より三十倍も價值がある、と。私が君に偽りなく言うならば、私にはあの牽強附會な言い廻しは分らない。マレルブやデュ・ペロン樞機卿やデュ・ヴェールや其の他私が宮廷で會つたもつとも優れた人々もそうした言葉については次のように言っています、それは町を通過して教會へ行くのに他の人々はたゞ歩いて行くのにびよん／＼踊りながら出かける人間と全く同じであり他人に氣に入らうとする類である、と。どうかお願いですから、生粹のフランス人には分らないようなあんな言葉を私に送らな

いで呉れ給え。」(cf. Pierre Humbert: un amateur, Peiresc. 1933. p. 192)

こゝでペレスクが攻撃している言葉とは當時イタリヤのマリニヤゴンゴラの影響を受けてフランスに流行していた所謂ブレンオジテである。デュ・ブイ兄弟の飾り氣のない簡潔な文體を賞美するペレスクにとつては、ちゞれ髪に粉をふりかけて得意然としている徒輩がつづる氣ざわな文章は純粹なフランス語と考えられなかつたのである。こうした見解は理性の詩人マレルブのそれと完全に一致し、而もそれはマレルブの本領ですらあつた。おそらくこうした根本的な感覺の一致において兩者の交友は一層緊密になつて行つたと考えて良からう。後マレルブがアンリ四世に見出されてパリに上京しえたのも、デ・シヴォ Des Yvetaux やデュ・ペロン Du Perron の推擧もあつたらうが、すでにパリの文壇と交渉深かつたペレスクの陰ながらの援助を想像できないであらうか。それを裏書きするように、

一六〇五年パリに上京するマレルブはペレスクと同道しているのである。だがマレルブはそのまゝ妻子をエイクスに残してパリに住みついてしまう。これよりマレルブとペレスクとの間に多數の書簡が交わされるのである。

もつともマレルブがパリに住みついた一因には妻マドレーヌとの感情的對立が考えられないでもない。一五九七年に發表されている「*Desssein de quitter une dame qui ne le contentoit que de Promesse*」(お義理でしか彼を満足させない婦人から離れる計畫)という詩は妻との離反を暗示していたものである。したがつてパリのマレルブとエイクスの妻との間には定期的な金の仕送り以外注目すべきものはなにもなかつた。だが息子のアントワーンに對するマレルブの態度は妻に對するそれと全く對蹠的であつた。また實際アントワーンも父マレルブの優秀な素質を受けつぎ、幼時よりラテン語、ギリシャ語の習得に天稟の才を現していたから、父親の愛情と希望も一層烈しかつたのであろう。このエイクスに残された一子アントワーンを親身になつて看守つていたのが他ならぬペレスクであつた。ペレスクは父子の仲介役をつとめ、アントワーンの成長する有様をパリのマレルブに逐一報告している。またマレルブもペレスクの報告に全幅の信頼を寄せつゝ、故國の一人息子に思いを寄せる。

何回となくペレスクはマレルブへの書簡の中で繰返す「貴方の小さいマルク・アントワーンはいつもますます可愛くなつて参ります」と。一生家庭を持たなかつたペレスクにとつてアントワーンは吾が子同様愛くるしい存在であつたのか知れない。未だ六歳に満たないアントワーンについてペレスクは次のように報じている。

「私はあの子ほど優しく利濃な子供を見たことがありません。しかも彼は貴方に會いに行くことしか語りません。

また他の同級生より良く出来ると言われる大きな喜びのために彼がいかに進んで自分の教課を習得しようとしている

かは貴方には信じられないほどでしょう。」(一六〇六年十月十七日付)

またペレクスはアントワーンの非凡な才能についてつぎのようにも書いています。

「高等法院長閣下(當時エイクスの高等法院長はギョーム・デュ・ヴェール)はあの子を時々自宅へ招かれます、それも心からのお招きなのです。ごく最近招かれました時、閣下があの子に貴方の美しい十四行詩を朗誦させて一綴毎に正しいフランス語の發音をわざわざ示して下さいましたが、貴方の息子さんは非常によく覚えこみ二度ほど練習した後には閣下と同じほですら〜と發音いたしましたので、閣下は全く感心されてしまいました。私はなおのとでした。私は神に祈ります、神がいつまでもます〜あの子を慈しまんことを。」(一六〇八年七月)

だがペレクスはアントワーンの成長を盲目的愛情を以て見ていたのではない。おそらく父親から受けたであろうところの慢心が幼子の舉作の中に現れてくるのをペレクスは見逃さなかつた。

「學院には彼よりも四・五歳年上の少年たちがありますが、彼らは彼(アントワーン)ほどの分別も能力も自信も持つていません。しかしまた彼らは彼ほど補導や束縛の必要もありません。と申しますのは、あのように輝かしく活潑な精神が自己をみとめ、自己の些細な見解を固執することは、大いにありうることだからです。そうした考えは、寛大な母親よりは嚴格な人物によつて抑えつけられる必要がしばしばあります。」(一六〇九年五月十二日付)

これは、やがて決闘に倒れて老詩人に深い歎きをもたらすに到る青年アントワーンの性格を明確に豫言するものであつた。このように透徹せる觀察と卓越せる教示に満ちたペレクスの書簡はあたかもルソーの「エミール」を思わせるものがあつた。

このように二人の間に介在したアントワーンの非業の死にもかゝらず、なお兩者の關係は生涯變らぬ歩みをつづけた。それはフランスの精神史上に特筆さるべき幾つかの友愛の一つに數えあげらるべきものである。

三

良き親代りペレスクに見守られつゝ育つたアントワーンはやがて父のいるパリに上京してくる。おそらく法律の勉強を完成するためであつたらう。プロヴァンスの法曹界に有力な縁故を有する母マドレーヌをはじめ、ペレスク等のすゝめもあつてアントワーンは法律を専攻していたのである。劍帶貴族の純血を誇るマレルブはブルジョワから成り上る法官貴族を少からず輕蔑し、最初息子の法科志望に反對していたが、結局ペレスク等の見解に従つたようである。一六二〇年エイクスに戻つたアントワーンはすでに辯護士の資格を持つていた。またマレルブも一六二二年五月には久しぶりでエイクスに歸つてゐる。これは辯護士となつた息子の高等法院入りを運動するためであつたらしいが、一説には一家の財産を管理するためであつたとも言われている。

ところが父の歸郷後二日にして息子アントワーンは或るユダヤ系の官吏と喧嘩をし、決闘を行つたのである。父マレルブは高等法院から逮捕状を發せられた息子を救うべく折良くエイクスを通過したルイ十三世に詩を獻する等あらゆる手段を盡す。その甲斐あつてアントワーンの身柄は別の高等法院に移されて裁判されることとなり、結局、有耶無耶のうちに釋放された。だがアントワーンの性格は宿命的であつたとも言えようか。一六二四年六月、彼はやはり決闘でエイクスの市民レーモン・オドゥベールという人物を殺してしまつたのである。再度逮捕されたアントワーン

の身柄は、父親の必死の奔走の結果、ブルゴーニュ高等法院に移され、揚句の果は主客轉倒してアントワーンの正當防衛が認められ、ごく軽い罰金刑に處せられたにすぎなかつた。一六二五年十月にはアントワーンはすぐにエークスに戻っている。

當時、決闘は法律によつて一應禁ぜられていたはずだが、その刑法上の不備によつて犯罪者は往々にして簡単に釋放される現状であつた。したがつて決闘に限らず總べての犯罪に就いて今日想像しえない程の抜穴が多數設けられていた。宰相リシリュウ出るに及んで中央集權の確立と共にそうした法制上の缺陷は除々に改められていつたが、アントワーンの時代はまだ如何ようにも手ずるによつて刑罰を逃れることができたようである。

だが遂に因果はめぐる日が到來した。一六二七年七月はじめアントワーンは友人の決闘に立會ひ、やはり相手の介添役として立會つたフォルチア・ド・ピールという人物と口論し、その場で身に數々所の傷を受け數時間で絶命した。法の判決は免れたが神の審判を逃れることはできなかつたとも言えよう。詳細をベレスクより傳へ聞いたマレルブの悲歎と憤怒は頂點に達した。七十を越えた老詩人が白髪を振り亂して若き國王ルイ十三世に復仇を哀願する様は悲劇を通りこして宮廷人には滑稽にすら見えたようである。この激烈な感情の中から生れたのが「ロシエル人の反亂を誅し、彼らに味方してレ島に來れるイギリス人を追い拂わんとする國王のためのオード」〔Ode pour le Roy, alliant Chastier la Rebellion des Rochellois et chasser les anglais, qui en leur faveur estoient descendus en l'isle de Re〕であつた。宮廷の御用詩人という制約はさておき元來個性的な詩想に乏しかつたマレルブが彼の生涯を通じて稀に見らるゝ個性的迫力と悲壯美を歌つた。それは彼自らの復仇への誓いと國家のそれとが交錯して狂おしきまで

一橋論叢 第二十八卷 第六號

「撃ち破つて祖國の神の犠牲たらしめよ

かの地獄の魂もて傲れる輩を

われらが解放のために惜む勿れ

彼らに鐵火をも。」〔五行―八行〕

Fay choir en sacrifice au demon de la France

Les fronts trop eslevez de ces ames d'enfer.

Et n'espargne coulieux pour notre delivrance

Ny le feu ny le fer.

「進め、根絶やしに彼ら撃滅のため

君が雄々しき怒りをば貫き通せ最後まで

斷じて耳かするなかれ、彼らのため

君に聳く憐憫寛容の聲。」(二九行―三二行)

Marche, va les destruire; esteins-en la semence,

Et suy jusqu'à leur fin ton courroux genereux,

Sans jamais escouter ny pitié ny clemence

Qui te parle pour eux.

ロシエルの民こそいゝ迷惑だが、一人子を失える老騎士の心中はさこそと思いやれる。こうした例外的な詩においてはまた例外的な誇張が不思議とわれわれの耳を傷つけない。

「空にそびえ立つ城壁も

慎重に築かれし堡壘も

死者を蘇えらするほどまでに

掘られし穴も益はなし。」〔三三行—三六行〕

Ils ont beau vers le ciel leurs murailles accroistre,

Beau d'un soin assidu travailler à leurs forts,

Et creuser leurs fosses jusqu' à faire paroistre

Le jour entre les morts.

ロンサール降つてはデポルトにおいてマレルブが極力攻撃したところの不自然な誇張がもつとも素直に許容されていること、こゝに此の詩の性格があり、限界もあつたわけだ。しかもこれが政治詩として無類の成功を博した所以は次の詩句に示されるごときマレルブの時代感覚の鋭さにあるのである。

「彼らをして欲するに任せ、企つに任せよ

君が立場が神のそれなれば良し。」(三七行—三八行)

Laisse-les esperer, laisse-les entreprendre :

Il suffit que ta cause est la cause de Dieu.

マレルプをして悲劇の主人公たらしめたアントワーヌの死は斯くして、また彼を光榮もて包む結果となつた。だが其の月桂冠はおそらくマレルプの眼には映じなかつたであろう。一人子の死はあまりにも老詩人にとつて悲劇的でありすぎたからである。理性によつてはどう仕様もない感情、子供への愛情、それはマレルプにとつて理性を超えた必然と見做された。されば彼は「子の死について」というソネットの中で歌う。

「おー、わが救いの神よ、理性にて

わが心の悩み癒えざれば

復仇の希願もまた正當なり。」(九行—十一行)

O mon Dieu, mon Sauveur, puis que par la raison

Le trouble de mon ame estant sans guerison

Le veu de la vengeance est un veu legitime.

だが果してアントワーヌの死は彼自身の責任であろうか。父マレルプのあまりにも強烈な自我こそ息子の悲劇、否、父親自身の悲劇の責任者ではあるまいか。やはり上掲の「國王のためのオード」の中でマレルプは一見息子の死も忘却したかのごとく自己を誇示している。

「われに寄する詩神の強き慈みは
わが搖籃を遠く出でずして始まり
われ若くしてそれを得
生涯の果にてなおそれを有す

われ詩神より受けたるものを
君がために産み出さん、君は
わが名指しを受け、君が額は

嘗てなき光もて諸王の上に輝かん。」（一四一行—一四八行）

Les puissantes faveurs dont Parnasse m'honore

Non loin de mon berceau commencèrent leur cours;

Je les posseday jeune, et les possede encore

A la fin de mes jours.

Ce que j'en ay recu, je veux te le produire;

Tu verras mon adresse, et ton front ceste fois

Sera ceint de rayons qu'on ne vit jamais luire

Sur la teste des rois.

神も王も人も懼れざるときマレルブの尊大な自負心は彼の詩に雄大な構想と男性的な韻律を與うるに大きな力を
持つていたのであるが、同時に彼自身の悲劇の原動力であつたと言えよう。

四

一六〇五年パリに上京してきたマレルブはアンリ四世の意志に従いベルガルド公 Duc de Bellegarde の保護を受
けることとなり、下僕一人馬一匹を與えられて公の邸内に住んだ。ベルガルド公の小姓をつとめていたラカンがマ
レルブを知つたのはこの時である。やがてアンリ四世が死に、攝政となつたマリ・ド・メディシスによつて一六一〇年マ
レルブは始めて年金五百エキュを受ける身となり、ベルガルド公の保護から獨立した。だがその日常生活は決して樂
ではなかつた。友人に出す料理にも事缺くことが少くなかつたのである。詩を作つて生計を立てること、それは當時
今日以上に冒險であり、諷刺詩人ジャック・デュ・ロランも歌つてゐるように「詩作とは一個の人間を驛馬車に乗せ
て病院へ送りこむ宿命的な操作」exercice fatal d'envoyer en poste un homme à l'hôpital [cf. E. Magne: La
vie quotidienne au temps de Louis XIII. éd. Hachette. p. 181]であつたのだ。サンタ・マンの『泥んこ詩人』
Poète crotté シャルル・ソレルの『フランシオン』や『ポリアンデル』に登場する人物ミュシドオル Musidore や
ミュシヂューヌ Musigène の惨めな生活は當時の詩人たちの實生活の反映であつたのだ。さればマレルブも自棄と不

満の思いをこめて述べるのである。「自己の慰み以外の報酬を望むために詩を作ることは愚であり、良き詩人も撞球の名手と同様に國家にとつては役に立たぬものである」と。「ラカン著、『マレルブ傳覺書』参照」したがつて桂冠詩人として一世に君臨したマレルブも、スカロンが例によつて誇張して歌っているように、

En ses vieux ans il n'est de bon

Que du laurier, comme un jambon.

[cf. E. Magne: op. cité, p. 192]

その晩年には月桂冠以外の財寶をなんら持ち合せなかつた、というのが真相ではあるまいか。

だがノルマンディ生れのマレルブにとつて、プロヴァンスが第二の故郷であつたとすれば、パリは第三の故郷となつていた。ランブウイエ侯爵夫人のサロンは彼の警句を心よく迎えてくれ、夕ともなれば、ラカン、メナール、コロンビイ、デュムチエ等の若き詩人たちが彼の宅を訪れては談論風發して彼の自尊心を十分満足させてくれるのであつた。だが宮殿における御用詩人としてのマレルブの生活は果して彼にとつて満足すべきものであつたらうか。内亂が鎮まりかけたアンリ四世の晩年以來、再び王侯貴顯に對する頌詩や獻詩が流行しはじめ、詩人たちは主人たちの結婚、戀愛、誕生、死去、その他諸々の宴會に際して詩を作つた、否、作らせられたのである。《Poésie officielle》とはそうした類であり、封建的な階級關係の表現にすぎなかつた。したがつて氣位の高いマレルブが何處まで彼の地位に満足していたかは興味ある問題である。

一六〇六年二月二五日宮廷で行われた舞踏會のためにベルガルド公の命によつてマレルブは《Aux dames, pour

les demy-marins conduits par Neptune」というソネを作つたが、その間の事情を述べたペレストク宛の書簡は宮廷における詩人の一般的制約をはつきりと告白している。

「命令には服従しなければなりません。……しかし、これは所望された詩であり、必ずお賞めにあずるかも知れません。だが不幸なことに、私自身はこの詩を賞めませんし、またこの詩が他人に見られることを欲しません。」

氣が進まぬながらも詩を作らねばならないこと、駄作と知りつつ發表しなければならぬこと、それは詩人にとつて自己偽瞞であり自己放棄であつたはずだ。だがマレルブは一再ならず心に不満をいだきつゝ務を果す。《Poëte Alcandre》はアンリ四世に代つて王の戀人シャルロット・マルグリット・ド・モンモランシ嬢に宛てた戀歌であるが、それを作つた動機をマレルブはやはりペレストクにつきのように報じている。

「前に申しましたように、王妃は彼女の舞踊を見るように私に命じておられました。それについて私の意見を聞かんとため兩陛下は私をお呼びになつたのです。……だが（參上しますと）國王は舞踊とは關係のない別の「戀路」Galanterie についで私に話をされました、それこそ彼が私をお呼びになつた本當の理由であり、舞踊は單なる口實にすぎなかつたのです。」

王妃に隠れて五十五歳にもなるアンリ四世が十六歳の少女に狂戀する有様はマレルブにとつて苦々しい光景と映じたのであろう。だが命令には服従しなければならなかつた。官廷におけるマレルブの宿命的な憂鬱は所詮彼自身の矛盾に歸着する。

こうした制約の中でおかつマレルブの天才が生かされたとすれば、それは眞に詩的な領域と申すよりは寧ろ技術

的な領域においてであろう。高い格調を帯びた強張音の排列、簡潔にして爆動的な表現、それは王者の心を喜ばすと共に、今日なおわれわれの耳に何かしら強烈な個性を訴えてくるのである。《A la Reine sur la bien-venue en France》はマリー四世に嫁ぐマリ・ド・メシムに捧げられた比較的初期の作品であり、それだけに一層社會的束縛も感ぜられず、應揚な雅調と純粹な抑揚に満ちた傑作であつた。

Peuples, qu'on mette sur la teste

Tout ce que la terre a de fleurs

Peuples, que ceste belle feste

A jamais tarisse nos pleurs;

Qui aux deux bouts du monde se voye

Luire le feu de nostre joye:

Et soiens dans les coups noyez

Les soucis de tous ces orages,

Que pour nos rebelles courrages

Les dieux nous avoient envoyez.

神話的比喩すら人間情味に充ちているのもマレルンの卓越せる表現力に歸着する。

Quantefois, lorsque sur les ondes

Ce nouveau miracle flottoit

Neptune, en ses caves profondes,

Plaignit-il le feu qu'il sentoit !

Et quantefois en sa pensee,

De vives atteintes blessée,

Sans l'honneur de la royauté

Oui luy fit celer son martyre,

Eust-il voulu de son empire

Faire eschange à ceste beauté !

だが此の領域 (poésie officielle) に於て見ざるべきものは極めて少く、多くは《Grand et Grand prince de l'église》と歌われたりシリュウへの獻詩のごとく追従と誇張に充ちた駄作であつた。其の領域から離れて自己の世界を歌つた数少い詩作の中にはマンレルンの別個の(おそろくは彼の最もすぐれた方向となりえたかも知れない)天才がうかがわれる。《ダモンの影を慕つて》(Aux ombres de Damon) は彼の諷刺詩人として更にはモラリストとしての才能を惜ませるものではない。

Mais, ô loy rigoureuse à la race des hommes !

C'est un point arrêté, que tout ce que nous sommes,

Ysus de' peres roys et de peres bergers
La Parque également sous la tombe nous serre ;
Et les mieux établis au repos de la terre
N'y sont qu' hostes et passagers.

Tout ce que la grandeur a de vains équipages,
D'habilllements de pourpre et de suite de pages,
Quand le terme est échu, n'alonge point nos jours ;
Il faut aller tout nus où le destin commande ;
Et de toutes douleurs la douleur la plus grande,
C'est qu' il faut laisser nos amours :

(意譯) 「されど人類にとりて何と厳しき掟よ、われらがある一切は定められたる點なり。王者を父に持つも、將
牧人を父に持つも、なべて死神はわれらを墓に閉じこむ。世の束の間に産をなせる者も、所詮は過ぎゆく旅人客人に
すぎず。名聲に伴う空しき行列も、緋の衣も、小姓の追従も、時到らば、われらの壽命を延さず。運命の命ずる
所を全裸にて歩め。されど、なべての苦痛にまさる苦痛、そはわれらが戀を棄つることなり。」

だがマレルブが此の領域(諷刺詩、風俗詩)においてマチュラン・レニエと争うことは不可能であつた。またレニ

エのみならず夫々の領域でマレルブを超える當代の詩人は少くなかつた。自由を謳歌する田園詩人テオフィール、音楽と繪畫に富む天才的なバツカス詩人サン・タマン等々。だが彼らはマレルブのごとく大地を歩む術を知らなかつた。詩法を伴わぬ彼らの天才は徒らに濫費されたにすぎなかつた。それに反してマレルブの數學的に計算された地上の足跡は決して消え去ることはなかつたのである。彼はその適確な軌跡をモンクレチアンの『ソフォニスブ』やデポルトの詩集に對する批判の中で明確に暗示する。私は次章で特に『デポルト註釋』を取り上げてマレルブの詩論を再現することを試みよう。

五

諷刺詩人マテュラン・レニエの叔父に當るフィリップ・デポルトは七星派の正統として當時詩壇に重きをなしていた。フンサールの莊嚴やデュ・ベレエの優雅に匹敵しえなかつたとは言え、デポルトは彼らの精神にもつとも忠實な一人であり、更にモリス・セーヴの技巧をも攝取して十六世紀フランス詩の生きた代辯者であつたのだ。一日デポルトがマレルブを招待して自作の聖詩を披露せんとした時、マレルブが「貴方の詩を拜見するよりはスーブの方がましですよ」と答えたという話は、兩者の距離を示すと共に二つの時代の差異を物語るものである。その席に列していたデポルトの甥レニエはマレルブの態度に憤慨して『過激な批評家』(Le critique outré)と題する諷刺詩を發表しているが、そこに畫かれたマレルブの姿は中々に正鵠を得たものである。

Comment ! il nous faut donc, pour faire une oeuvre

Qui de la calomnie et du temps se défende,

Qui trouve quelque place entre les bons auteurs,

Parler comme à Saint-Jean parlent les crocheteurs !

(意譯) 「なんと言うことか。時代の中傷を避けて優れた作家たちの仲間入りできる作品を作るためには、われわれはサン＝ジャン街で人足供が喋っているように語らなければならないとは。」

事實ラカンの覺書に従えば、フランス語の或る言葉について人から意見を求められると、マレルブは常に乾草の荷揚所の人足の許へ助言を求めに行つたし、また「彼ら(人足たち)こそ私の教師である」と言つていたそうである。したがつてレニエの指摘は決して單なる誇張ではなかつたのである。だが荷揚人足が喋っているフランス語を参考にするという表現の裏にはマレルブの或る心組みが秘められていたわけであり、彼の詩論と申すべきものが暗示されていたのである。われわれはマレルブからボワローの『詩論』のごとく整備せる所論を引き出すことはできなかつたが、それに代り得る資料を與えられている。それが所謂『デポルト註釋』である。それは一個のまとまつた作品ではなく、マレルブがデポルトの詩集をひもときながら折にふれて批判や訂正を餘白に書きこんだ極めて断片的なノートにすぎないが、そこには詩作に關するマレルブの可成り明確な考えが示されている。われわれはそれを再構成することによつてマレルブの詩論なるものを或る程度まで復元しうるのではあるまいか。

(A)構想の合理性。

Je veux bâtir un temple à ma chaste déesse……

Mon oeil sera la lampe et la flamme immortelle,

Qui n'ard incessamment, servira de chandelle,

[Desportes : Sonnet XLIII]

「われはわが清き女神のため御堂をば建てぬ……」

わが眼は燈明となり、不滅の焰となりて、

たえずわれを焦がして燭火の務を果せぬ……」

インルプはこの着想を評して曰く、「世に笑うべきものありとすれば、まことにかゝる空想ならん」と。彼はロンサール以來の仰山にして不合理な fiction poétique を極度に嫌つてゐた。それはアンリ四世に獻ぜられたマチユラ・レニエの書簡詩に對する反感の中にもよく現れてゐる。〔『フカン覺書』参照〕参考まで當のレニエのヒビートルの最初の一節を擧げると、

Il estoit presque jour et le ciel souz-riant

Blanchissoit de clairté les peuples d'orient ;

L'Aurore aux cheveux d'or, au visage de roses,

Desja, comme à demy, decouvrit toutes choses ;

[cf. Œuvres complètes de Rêgnier. éd. Garnier, p. 215]

「まさに陽は昇らんとして微笑む空は光もて東の民を明けさめ、金色の髪、薔薇の頬もつ、曙はすでに半ば萬物

を見出せることし。」典型的なロンサルバりの表現と申せよう。斯くのごときは現実的合理主義者マレルブの許容するところではなかつたのである。だが果してマレルブ自身この原則を終始徹底しえたであろうか。特に初期の彼の詩作の中には多分に問題がある。裏返して申せば、こうした原則を確立するまでにはマレルブ自身の變化と發展が豫想される。また彼の詩が無味乾燥の誹を蒙るのもここに理由が存在する。

(B) 概念の合理的排列。

これは原則(A)と當然關連する問題である。いかに現實的な概念もなんらの脈絡なしに羅列されるならば所詮不合理なイメージを産み出すにすぎぬ。

Une pâle couleur de lis et d'amour teinte

[Desportes: Diane; Sonnet VIII]

[百合と愛情に染める青白き色]

百合 lis と歌つたならば董 oeillet とでも並列させるべきだとマレルブは言う。「花には花を木には木を以て」(la fleur avec la fleur et la passion avec la passion) 歌つてこそ始めて詩になりうる、と彼は言う。そこにはすでに古典主義的秩序の意識が伴われる。

更に(B)の規則を補足するようにマレルブは言う、相類似したものと雖も、同一のものを繰返すことは一層愚劣である。

En parlant de beauté, la beauté qui m'allume

マレルブ小論

Viens seule à ce coup n'ion courage émuvoit.

[Desportes: Diane; Chant d'amour]

マインルンは言う、點火 allumer した以上、こころ感動 émuvoit と付け加える必要があらうかと。特に詩におけるこの意味の重複は意味そのものの破壊である。格言風なマインルンの詩の簡潔な緊迫感(B)の規則そのものとも言えよう。

(C)同音系連続の回避

Si la foi plus certaine en une âme non feinte.....

La volupté mignarde en chantant t'environne.....

Madame, Amour, Fortune. et tous les éléments.....

O Songe, ange divin.....

O Mort, contente-toi, ton char est honoré.....

右のデボルトの詩句に見らるゝごとく同音系のシラブルの連続は詩句の緊張感と多様性を損う。しかもそうした單調を破るために種々の技巧が弄せられる。

Et ne sens pas souvent ton doux allègement

[Desportes. Liv. II. Sonnet VII.]

こうした物好きな押韻はモーリス・セーヴ以来の所謂輕業師的押韻に屬する。この傾向は十七世紀初期のフレシヤ

ズ précieux にもビュルレスク burlesques やグロラスク grotesques と稱せられた詩人たちにも強く見られ、特に鬼才サン・タマンの作品中にはユニークな獨創性を以て現れているが、多くは淺薄な形式主義に墮するものであり、正統派マレルブが強く嫌つた所である。

(D) オルトグラフの確立。

當時の文字の綴(つづ)りは亂脈をきわめていたが、まだ其の權威が一方に確立していなかつたから、一人マレルブの主張を以てしては如何ともなしがたき趨勢であつた。その問題が眞に論議され決定されるのは、やはりアカデミー・フランセーズ設立後に屬する。これは單に文學的問題に留らず、廣い意味で政治的社會的問題であつたから。しかも今日マレルブが此の領域において偉大な文法家としての名譽を與えられている所以は興味ある問題だ。

まず技術的に老察するならば、『テボルト註釋』中には左のごとき訂正例が無數に見出される。

Tout rit par où tu passes, et ta vie……

passes (と訂正)

La grâce, quand tu marches, est toujours……

marches (と訂正)

Ségare au labyrinthe de diverses erreurs

labyrinthe (と訂正)

もてゐる。こうした自信はいかにして可能であつたか。

Le feu qui n'iard le coeur servira de clarté.

Tout le verbe ardre est hors d'usage. [ardre という動詞全體が慣習に外れている]

Or' je suis plein d'amour et or' je n'aime pas.

Or' et Or' est hors d'usage [Or' et Or' は慣習にない]

つまりマレルブにとつて習慣 usage こそ言葉の唯一の規準をなすものであつたのだ。そしてそこに言う習慣とは、パリのサン・ジャンに働く荷揚人夫によつても承認されなければならない現在の民衆の持つ習慣であつた。したがつてマレルブが勝利を得たとするならば、それは生きた大衆の言葉の勝利を意味していたはずである。しかもマレルブは此の掟を守るに當つて他の誰よりも勇氣を示した。ラカンの覺書によると、或る日、アンリ四世が故ルイ十二世より與えられた書簡をマレルブに見せた時、マレルブはそこにルイ十二世が自らをルイ Louis と署名する代りにロイ Lois と署名しているのに氣づき、出し抜けにアンリ大王に向つて「陛下もロイという名をお持ちですか」と尋ねたそうである。このように大王に對してすら臆する所なく自説を堅持してこそマレルブの主張は生かされたのである。

『デポルト註釋』が含有する問題は勿論これに盡きるわけではない。また批判する立場の有利と安易さを見逃すならば、マレルブを必要以上に買いかぶる恐れもあろう。更に綿密な考察を私は今後の課題としたい。

近代のフランス詩史における聖書の影響はクレマン・マロの聖詩篇譯業から論じ起されなければならないであろう。熱烈なプロテスタントであつたマロの後に出了たブレイアード派の一人アントワニス・バイーフはマロと反對のカトリックの立場から聖詩篇の佛譯を試みる。かように聖書がフランス詩に與えた影響は最初から黨派的色彩をまぬがれなかつたのである。マロを襲ぐ者にはモンクレチアンあり、バイーフを襲ぐ者にはデポルトがあつた。その間の歴史は稿を改めて詳しく論ぜらるべき問題であり、本稿においては省略する。

サン・フランソワ・ド・サール Saint Francois de Sales や ヴォクラン・ド・ラ・フレネ Vauquelin de la Presnaye によつて推賞されたデポルトの聖詩 Psalms もマレルブからは「貴方のスリーブの方がましですよ」と輕蔑されなければならなかつた。アンリ四世の即位と共にフランスの詩の歴史もすでに新たな歩みが必要としていたのである。長い間の宗教的對立に疲れ果てた民衆はあらゆる意味において平和を望んでいた。その民衆の意志は新しき詩人によつて表明されなければならなかつたのである。こうした過程にあつて僅か四篇の聖詩を作つたにすぎないマレルブのそれが非常な成功を収めて十七世紀全般を通じて愛誦しつづけられたことは注目に値しよう。

プロテスタントに改宗した父親を敬遠して家出したと言われるマレルブは、さりとて熱心なカトリックであつたわけでもなく、比較的兩派から自由な立場を保つていたようである。「單なる船客にとつて船の操作などはどうでもよい」と言つて政治的問題を回避していたマレルブが宗教的問題に介入することを好まなかつたことは容易に想像されうる所である。と申すのは、當時の僧侶たちは教會や僧院の權力を政治的權力と結託させ、また政治家もそれを利用し合ひ、政治即宗教という權力組織が社會の上層部を構成し、内亂後も絶對王制の確立を目指して政治家と坊主の

動きはますます激烈になつていたからである。宮廷にあつてそうした動きを見せつけられてきたマレルブが政治も宗教も回避するに到つたのは高邁な彼の性格からして當然であろう。したがつて彼の聖詩はそうした俗権の葛藤からは離れた宗教の本質的問題と關連する。

最初に發表された聖詩篇第八の譯案たる「わが主なる神よ」《Domine Deus noster》は次のような詩句ではじまる。

O sagesse eternelle, à qui cet univers

Doit le nombre infiny des miracles divers

Qu' on voit egalement sur la terre et sur l'onde

Mon Dieu, mon Createur.

Que ta magnificence estonne tout le monde,

Et que le ciel est bas au prix de ta hauteur.

「おー、永遠の叡智よ、この宇宙の

限りなき奇蹟の種々は御身に負う

そは大地大海の上にひとしく見らる

わが神、わが創造主よ

御身の偉業は世界を驚かし

天空も御身の高みには及ばず。」

こゝには「永遠の睿智」、「奇蹟」、「創造主」と云つたキリスト教の本質的理念が素直な詩句の中に而も雄辯に歌われている。

Il n'est faiblesse égale à nos infirmités

Nos plus sages discours ne sont que vanitez,

Et nos sens corrompus n'ont goust qu' à des ordures.

Toutefois. o bon Dieu,

Nous te sommes si chers, qu'entre tes creatures

Si l'ange est le premier, l'homme a le second lieu.

虚榮に充ちた人間も慈愛の神によつて天使に次いで第二の地位を與えられている。このマレルブの詩句は内亂によつて意氣阻喪した國民に新たなる自信と希望を與えんとするものであり、その崇高な抑揚と人間的な愛情とによつて高く評價されてよからう。國民的詩人としてのマレルブの面目躍如たるものがある。

かくのごとくマレルブはボッシュエに先んずる偉大な説教師であつたが、更に彼の名聲を文學史上不朽ならしめたのは詩篇第一四五の翻案である。「最早望むなかれ、吾が心よ、世の空しき嘆きを」*N'esperons plus, mon ame, aux promesses du monde* という詩句にて始る本詩篇は、當時の社會に對する痛烈な諷刺を含み、説教家としてのみならず偉大なモラリストとしてのマレルブを表明する。

一橋論叢 第二十八卷 第六號

En vain, pour satisfaire à nos laches envies,

Nous passons pres des rois tout le temps de nos vies,

A souffrir des mepris et ployer les genoux ;

Ce qu' ils peuvent n'est rien : ils sont comme nous sommes.

Veritablement hommes,

Et meurent comme nous.

Ont-ils rendu l'esprit, ce n'est plus que poussiere.

Que cette majesté si pompeuse est si fiere

Dont l'esclat orgueilleux estonne l'univers :

Et dans ces grands tombeaux où leurs âmes hautes

Font encores les vaines,

Ils sont mangez des vers.

【意譯】

甲斐なくも卑屈なる望みを充ちんと

われらは生ある限り國王の傍を過ぎ

侮蔑を忍び、膝を屈する。

彼らは爲す所なく、われらのごと

まさに人間なれば

われらのごとく死ぬ。

精神を賣れる彼らの斯くも豪華尊大な

傲れる輝きもて宇宙を驚かす

かの王威も最早塵埃チリアンクに他ならず

かの大なる墳墓の内にて高慢な魂もて

なお徒らにおごれど

彼らも所詮蟲の餌食なり。

或る批評家のごときは此の一篇を以てマレルプの全作品に代えうると述べている。いさゝか誇張に過ぎるが、神の名において國王も一個の人間に過ぎざることを喝破する此の激烈な諷刺精神は、たしかに他のマレルプの作品には見られぬものであり、偉大な彼の未知數を豫想させる。

彼の弟子ラカンも亦その半世を聖詩に捧げ、多數の作品を残しているが、そこには師の面影が歴然とうかがわれる。

Ce long habit de pourpre et ce grave ornement

マレルプ小論

Qui vous égale aux dieux dans le siècle où nous sommes.

Ne vous empêche point, au fond du monument,

D'être mangés des vers comme les autres hommes.

[Racan : Psalme LXXXI.]

「かの緋の長衣、嚴めしき裝飾も

生ける間こそ汝を神に並ぶるも

墳墓の底にて他の人間のごとく

汝が蟲の餌食となるをなまたげず。」

参考文献

- 1) Les poésies de Ma herbe, par P. Martinon, éd. Garnier.
- 2) Malherbe, Racan, Maynard. éd. Classique Larousse.
- 3) Oeuvres Complètes de, Régnier, par. P. Poitevin, éd. Garnier
- 4) Pierre, Humbert : un amateur. Peiresc. 1933.
- 5) Revue des cours et conférences. N°3.—N°4. 1933.
- 6) Revue des cours et conférences N°11. 1922.
- 7) G. Mongrédién : La vie de Société au XVII^e et XVIII^e siècles, éd. Hachette.

- 8) E. Magne : La vie quotidienne au temps de Louis XIII, éd. Hachette.
- 9) Tallement de Réaux : Les historiettes, par Mongrédien, éd. Garnier.
- 10) René Larou : Les étapes de la poésie française. 1951.
- 11) V.-L. Sautnier : La littérature du siècle classique. 1951.
- 12) Allem : Anthologie poétique française. XVII^e siècle. éd. Garnier.
- 13) Sainte-Beuve : XVII^e siècle, les poètes, annotées par M. Allem. éd. Garnier.